
勇者の仲間だったけど、魔王を倒したので先生はじめました

shirou

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者の仲間だったけど、魔王を倒したので先生はじめました

【Nコード】

N8997U

【作者名】

shirou

【あらすじ】

世界中を恐怖のどん底に陥れていた魔王を勇者一行が倒して早三年。人々が平和を謳歌する中、勇者一行の一員で地上最強の大魔法使いと呼ばれる少年コーンもこの春めでたく魔法学院の先生になった。これで彼にもようやく平和で穏やかな生活が訪れる……と思われたのも束の間。彼が担任となったクラスは何やら危険な香りのする美少女ばかり。はたして彼は問題児だらけのクラスでやっていくのだろうか……！？

最強の大魔法使いと美少女が繰り広げる異世界学園系ハーレムファンタジー、はじまります！

プロローグ

この世を恐怖の深淵へと沈めていた破壊と殺戮の化身たる魔王。彼が勇者と仲間によって倒され、早三年もの時が流れようとしていた。いま大陸にすむ人々は魔王復活以来数十年ぶりに訪れた平和を心より楽しみ、安寧のうちに暮らしている。それはかつて魔王軍と熾烈な戦いを繰り広げた勇者の仲間たちとて例外ではなかった。彼らもまた、過酷な魔王討伐へと旅立つ以前の穏やかな生活に戻っているのだ。これはそんな勇者の仲間たちの一人、大魔法使いコーンが繰り広げる物語――。

麗らかな日差しが大地を照らし、影法師がぼやける春。褐色のレンガが敷き詰められた通りをコーンはカツカツと足音を鳴らしながら歩いていった。通りの両側では東方より持ち込まれたサクラという木が盛大に花を咲かせていて、春の心躍るような雰囲気を感じさせている。コーンはその淡い花びらの舞い落ちる中をほほ笑みながら通過すると、巨大な門の前に立った。その門のわきにある門柱には、黒いプレートに金文字で「メルトバーレ魔法学院」と刻まれている。さらにその奥には、都の王城にも及ぼうかという巨大なレンガ造りの建物たちが覗いていた。

「いよいよ今日から僕も先生か……。生徒さんがいい子だといいな……」

「あつ、コーン先生ッ！」

「うん？」

コーンが振り向くとそこには一人の少女が立っていた。ちょうど舞い散るサクラと同じピンクブロンドのツインテールが揺れていて、そのはつらつとした闊達な笑顔はとてもかわいらしい。だが、その少女はなぜか生徒の制服ではなく教師が愛用する紅のローブに身を包んでいた。コーンはそれを疑問に感じると少しその細めの眉を歪める。しかし、少女はそんな事お構いなしにとてとてと彼に駆け寄ってきた。

「はじめまして！ 私は学年主任のシルフィーです！」

「どうもよろしく……って学年主任！？」

びっくりして眼を丸くしたコーン。彼はシルフィーを上から下までよく見てみる。ゆったりとしたローブに包まれたその身体は凹凸が一切なく、身長もコーンより頭一つ低い。だいたい百五十センチくらいだろうか。彼がどれほど眼を凝らして見たところで、彼女は大人には見えない。

そんな遠慮のないコーンの視線にシルフィーは顔を赤くした。彼女はそのまま少し顔をうつむけると、怒ったようにコーンに言う。

「そつ、そんなに見ないでください！ は、恥ずかしいじゃないですか！」

「じつ、じめんなさい！」

「もう、気をつけてくださいね！ それじゃあ行きますよ！」

シルフィーはそういうと、紅くなつた顔を勢いよくコーンの方からそらした。彼女はそのまま無言で彼の手を引っ張り、学院の中へと連れて行く。その半ば強制連行といった行動にコーンは「引っ張らないでください！」と頼らない声で叫んで抗議するものの、それは一切無視された。まさか女性相手に本気で振り払うわけにもいかないで、彼はそのまましぶしぶといった様子で学院の中へと連れて行かれる。こうして何はともあれ、コーンはメルトバーレ魔法学院の門をくぐつたのだつた。

こうして元勇者一行の大魔法使いコーンは、先生としての生活をスタートさせたのである――

一方そのころ。メルトバーレ学院の学院長室には二人の男がいた。一人は白いひげを伸ばした老人、もう一人はやせぎすの壮年男性である。彼らはそれぞれ飴色の木でできた豪華な椅子に腰を沈めて、古びた鏡に眼をやっていた。その銀製の鏡の黒いてらてらとした表面には学院の門付近が写されていて、その中央には先ほど門を潜つたコーンの姿がはつきりと示されていた。

老人はそのコーンの姿をいかにもおもしろくなさそうな様子で見ている。しきりに髭に手をやっては、不満げに眉をゆがめながらそれを盛んに撫でる。さらに彼はギシギシと歯ぎしりをする、喉の奥から絞り出すようにしがわれた声を出した。

「大魔法使いと聞いたからどんな男かと思えば……まだ少年ではな

いか」

「しかし学院長。奴はあの魔王をも倒した勇者一行の一員、腕は図りしれませぬ」

「問題ない。どれほど腕があろうが教師である以上、不祥事を起こせばわしの権限で追い出せる。それより生徒の手配は万全だろうか？」

壮年の男はねちっこい嫌な笑みを浮かべた。彼はそうして一拍ほど間をおいてから学院長の問いかけに答える。

「むろんです。奴のためにとびっきりの生徒を用意しておきました……」

「そうか。ははっ……はははっ！」

明りのつけられていない薄暗い学院長室に、ぬめるような気味の悪い高笑いが響いた。この底なし沼のような笑いが何を意味するのか。それはまだ誰も知らない――。

第一話 ファーストインプレッション

重厚な石造りの廊下。アーチ型の天井には精緻な細工のなされたシャンデリアがいくつもつりさげられていて、壁に取り付けられている窓からはわずかな色味を帯びた光が降り注いでいる。床には毛足の長い真紅の絨毯が敷かれていて、この一角がメルトバーレ学院でも重要な一角であることを如実に示していた。コーンはその堅苦しい雰囲気、何度か足を運んだことのある王宮に通じるようなものを感じて居心地が悪そうな顔をする。基本的に彼はこういった場が苦手であった。

「あの、どこへ向かってるんですか？」

「まずは学院長に挨拶をするのですよ。それで挨拶を終えたら早速担任になっている四年A組へいきます」

「職員室には後で？」

「はい、先生たちはいまそれぞれのクラスで授業をしていますから。職員室には生徒たちに会った後で行きますよ」

そうしていまいち落ち着かないコーンとはシルフィーとさし当りのない話をした。するとシルフィーの足が不意に止まった。ちょうどそこは廊下の突き当たりになっていて大きな扉がある。三人ぐらいまとめて出入りできそうなその重厚な木の扉には、学院長室と刻まれたプレートが貼られていた。

シルフィーはその扉をコンコンと軽くノックした。軽快な音が二度響いて、部屋の中から学院長と思しき老人の声が返ってくる。コ

ーンはその声に何か魔族にも通じるような嫌なものを感じたが、この場合は黙っておいた。シルフィーもまたコーンが一瞬ながら顔をしかめたことには全く気付くことなく扉を開き、中へと入っていく。コーンもまた、一礼して部屋の中に入った。

「こんにちはシルフィー先生。で、こちらが新任のコーン先生かな？」

「はい、よろしくお願いします！」

「うむ。わしとしても君のような英雄にわが学院で教鞭をとってもらえるのは光栄だよ」

学院長は椅子から立ち上がるとスツと手を前に差し出した。コーンは少しばかりぎこちない動作でそれに応じる。その眉は何かおかしいものでも食べたかのように僅かばかりではあるが歪められていた。すると学院長は芝居がかった大仰な動作で驚く。

「どうされましたかな？ そんな顔をなされて……」

「いえ、久々の長旅でつかれまして」

「ほほう、そうでしたか。ならばわしからの話は後日としておきましよう。今日のところは生徒たちへの挨拶だけ済まされればよい」

「ありがとうございます」

コーンは学院長にいやに丁寧な態度で頭を下げると、その場を退出した。シルフィーが部屋の入口へと向かった彼をあわてた様子で追いかけていく。こうして二人は学院長室を出て、生徒たちがいる

四年A組へと向かった。

学院長室のある職員棟から渡り廊下を通った先にある生徒棟。重厚で暗めの色彩で固められていた職員棟とは違って明るい雰囲気であとめられているこの棟を、シルフィーとコーンはゆつくりと歩いていた。廊下の壁には大きな窓がいくつもつけられていて、二人の顔はやわらかな陽光に照らされている。温かな春の日差しに照らされたコーンの顔はさきほどまでとは違ってかわって晴れやかだ。だが、シルフィーはそんな彼の顔をしきりに心配そうにのぞきこむ。

「コーン先生、疲れてるのなら挨拶は明日でもいいんですよ？」

「もう大丈夫です。たぶんさつき具合が悪かったのは緊張してたせいですから」

「えっ、そうなんですか？」

「はい。でもまあ、英雄が緊張で具合悪くしたなんて恥ずかしいですから、学院長には言わないで置きましたけどね」

「なあんだ、そうだったんですか。心配して損しちゃいましたよう！」

シルフィーはほっと大きく息をつくと、顔をほころばせた。小さく整った人形のような顔に、花が咲いたような笑みが浮かぶ。コーンはその様子もその様子を見ると、にっこりとほほ笑む。しかし、

その内面には彼女に嘘をついたことに対する若干の後ろめたさがあった。本当は先ほど顔色が悪かったのは旅の疲れでもなければ緊張でもない、何か得体のしれない感覚によるものなのである。もっとも、こんなことを言っても彼女に不安を与えるだけなので言うことはできないのだが……。

そうしてコーンが考えているうちに、二人は四年生のクラスがある四階にたどり着いた。この生徒棟は七階建てで、それぞれの階に一年生から七年生までの教室がある。このメルトバーレ魔法学院は十二歳で入学して、十八歳で卒業する七年制の学校なのだ。ちなみにこの学校は全寮制で、生徒や職員の寮まで含めると小さな街ほどの規模がある。

「さてと、ついたのですよ。準備はいいですか？」

「はい、もちろんです」

「4 - A」とプレートの掲げられた教室の前で、二人は一旦立ち止まった。コーンは大きく息を吸い込むと、着用しているローブに皺がないかどうか入念に確かめる。そして温かい目をしているシルフィーに見送られながら、教室のドアを勢いよく滑らせた。すると……

「くっ………！」

白い細長い物体が三つ飛来した。それらは宙を裂きながら、雷のような猛烈な勢いでコーンに迫る。コーンは紅のローブをはためかせると、間一髪でそれらを回避した。キインと響く金属音をコーンの耳に残しながら、それらは廊下の壁へと突き刺さる。コーンが振り返ってみると、廊下のクリーム色の壁がその白い何かが突き刺さ

った場所を中心として粉にまみれていた。どうやら白い物体はチヨークのようだ。

突然の出来事にコーンは眼を丸くして、半ば茫然とした表情で教室の中を見た。すると彼の眼に、黒板のわきに立って何やら騒いでいる二人の生徒が見える。一人は茶髪で活発そうな印象を与える少女、もう一人は碧色の髪をしたどこか浮世離れた雰囲気のおとなしそうな少女であった。その二人はコーンの方を驚き感心したような目で見ています。

「やるわね！ 私の超光速チヨークを回避するとは！」

「……すばらしい反応速度。驚嘆に値する」

「こらっ！ 何てことをするんだ！」

コーンがそうして二人の様子を見てみると、一人の生徒があきれたような声を上げて二人の前に現れた。その生徒の怒りでひきつった顔を見るや否や、二人は腰をかがめて逃げる体制をとる。だが彼女たちが逃げ出す前に、もう一人の生徒が持っていた紙製の棒のよなものが二人の頭に炸裂した。パコーンと小気味良い音が教室中に響き渡った。

「アリス、いきなり何するのよ！」

「……むう、痛かったの」

「お前たちの方こそ、仮にも担任の先生に向かって物を投げるとは！ 反省してさっさと席に戻れ！」

アリスと呼ばれた生徒は勢いよく二人の制服をひつつかんだ。彼女はそのまま二人をそれぞれの席まで連れて行くとする。無理やり引っ張られた二人はブウブウと文句を言ったものの、アリスはそんなこと一切気にしなかった。足を動かそうとすらない二人を、彼女は少女らしからぬ力でもって引きずって行く。そうしてまたたく間に教卓の前にいた生徒はアリスによってどかされて、コーンが入るスペースができた。

「……これから大丈夫かな？」

ぼそつと心配そうにつぶやきながらも、アリスによって確保されたスペースへと足を運ぶコーン。こうして彼は、様々な不安にさいなまれながら受け持ちの生徒へ挨拶すべく教室の敷居をまたいだのであった。

第二話 英雄は嫌いです

日差しの差し込む明るい教室。そこに在籍する生徒たちは、すでにコーンが入ってくるのを今か今かと待ちかまえていた。コーンは魔王に対峙した時にも匹敵するような緊張を感じながら、生徒たちの待つ教室の中へと一歩踏み出す。少々テンポの崩れた硬い足音が何度か響き、その姿が教卓へと達する。彼は緊張をほぐすべく、その薄い胸板を大きくそらして息を吸いこんだ。

「みなさんこんにちは、今日からこのクラスの担任になりましたコーンです。教科の方は戦闘実技を担当してます。一年間よろしくお願いします！」

「よろしく先生！」

「こちらこそお願いします！」

コーンが挨拶を終えると、何人かの生徒たちから歓声が上がった。ひとまず生徒たちからの反応は良好なようである。コーンはほっと一息つくくと、教室の中をよくよく見渡した。

生徒は十数名ほどしかいなかった。休んでいるというわけでもなく席自体の数が少ない。この学院自体が魔法使いの中でもエリートを育成することを目的としているため、全体として少人数のクラス編成となっているのだが、それでもかなり少なめの数である。しかしながら、教員一年生のコーンにとってこれはありがたいことだろう。

だが一方で困ったことに、このクラスの生徒は女子しかないよ

うだった。コーンは教卓の中から生徒たちの名簿を取り出すと、改めてその事実を確認する。思春期を魔王討伐のためにささげてきた彼にとって、女子とのふれあいなど未知数だ。彼の中にわずかな不安が生まれる。彼の眉間にほんの少し、皺が寄った。

そうしてコーンが動きを止めていると、最前列に座っていた一人の生徒が首を長くして彼の顔を覗き込んできた。彼女はコーンが少し険しい顔をしているのを確認すると、少々間の抜けた声でたずねる。

「先生どーしたの？ 複雑そーな顔して」

「えっ、ああなんでもないですよ。それより今日の出席を取りましよう。まずは出席番号一番、アリスさん！」

「はいっ！」

「二番、イースさん」

「はいい！」

「三番……」

出席はそのあと順調に取られていった。やる気十分な返事をするもの、気の抜けるような返事をするもの。それぞれの生徒が個性たっぷりの返事をする。コーンはそんな生徒たちの顔と名前を一致させるために頭をフル回転させた。今のところ覚えたのは先ほど教卓の前に立っていた少女たちのことぐらいである。碧の髪をしたおとなしそうな少女がルナで、活発そうな茶髪の少女がベルだ。まだほかの生徒たちは完全に顔と名前が一致するわけではないが、たか

だか十数人なので二三日で覚えられるだろう。

そうしていよいよ出席を取るのも最後の一人になった。コーンはふつと息をつく、少し大きめの声でその名前を呼ぶ。

「十三番、ラミさん！」

「……」

「ラミさん？ どうしました？」

「……嫌い」

それはとても小さな声だった。コーンは思わず耳を疑い、きょとんとした顔になる。するともう一度、ラミは先ほどよりも一回り大きな声で言った。

「あなたのことが私は嫌いよ、英雄の一人だから……」

「は、はい？」

いきなり嫌いといわれて眼を丸くするコーン。生徒たちもラミの言葉に驚き、彼女の座っている最後列に眼を向けた。すると、隣に座っていたルナがラミの方に目配せしながら立ち上がる。

「気にする必要はない、ラミは不思議な子だから」

「……」

教室にいた全員が思った、ルナも似たようなものだろうと。され

ど、自信満々な様子でそう言い放った彼女にはアリスですら突っ込むことはできなかった。教室の中を少し白けたような微妙な雰囲気が覆う。その時、一人の生徒がルナの方に鋭い視線を放った。そのふんわりとした豊かな金髪を見て、コーンはそれがオリーブという生徒だったと思いだした。

「……あなたにそれが言えた義理はなくってよ？」

「クルクルさんは黙ってる」

「誰がクルクルさんよ！」

「じゃあドリルさんでいい」

「あなた……仮にも貴族であるこの私をなめてますの？」

視線と視線が衝突した。二人の間にわかに火花が散る。空気が一気に張り詰めて、生徒たちの間をざわざわとした動揺が走り抜けた。すべての元凶であるラムを置き去りにして、二人の間の緊迫感はどうどん高まっていく。コーンは今こそ教師としての手腕を示す時だと意気込み、二人の元へと向かっていった。その手には彼が敬愛してやまない銀髪先生の名言集がアンチョコとして握りしめられていた。

「二人とも仲良くしなくちゃ、人というのは……」

「おい、ホームルーム中だぞ！ 喧嘩なら後にするんだ！」

「むづ……休戦なの」

「そうですね、風紀委員に逆らいたくはありませんわ」

「えっ……」

アリスの一喝で喧嘩を止めた二人。二人の喧嘩を止めるべく教室の中を歩いていったコーンは出番がなくなって、宙に浮いたような状態になった。彼は一瞬、ぽかんとした表情になる。すると近くにいた生徒がコーンの肩をポンとたたいて、何やら意味ありげに言った。

「英雄といえど、先生としてはまだまだってことだねっ！」

「うつつ、言い返せないです……」

こうしてコーンと生徒たちの初対面は、コーンに教師としての未熟さを実感させたのだった。しかし、この時あった出来事のうちの一つが大きな問題の予兆となっていようとは、誰も予測していなかったのである――。

「へえ、そんなことがあったのですか」

「英雄なんて呼ばれてる僕ですけど、教師としてはまだまだってことです」

「まだ新任ですからこれから成長していけば大丈夫なのですよ。心配することはないのです」

「そうですね!」

ホームルームが終わり、コーンはシルフィーと学院の中を歩いていた。シルフィーに彼が住むことになる寮まで案内してもらっているのである。二人は終始なごやかな雰囲気で、広い学園の庭を寮が建っている方へと進んでいく。広々とした芝生や垣根に囲まれた細い通路などを抜けて、二人はぐんぐんと寮のある学院の敷地の東端へと歩んでいった。

そうして進んでいくと、コーンの目に大きな三角屋根の建物が四つ飛び込んできた。左から男子生徒、男子職員、女子生徒、女子職員と壁に書かれている。どうやらここが生徒や職員の寮のようだ。コーンはそのうち男子職員の寮へと向かう道をさつと確認する。

「それではまた明日!」

「あつ、ちょっと待ってくださいです!」

「……?」

コーンを呼びとめたシルフィーは、口をもぐもぐとして何か言いたいようだった。コーンは怪訝な顔をして彼女の目を見る。すると彼女は観念したのか、ゆっくりと重い鉛のような唇を開いた。

「実はですね、大変言いにくいのですが……ちよつとした手違いがありましてその……。コーン先生には『女子職員寮』に住んでもらいたいのですよ……」

「えええっ!!」

コーンの心からの叫びが、黄昏時のメルトバーレ学院に響いた。
-。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8997u/>

勇者の仲間だったけど、魔王を倒したので先生はじめました

2011年7月20日22時16分発行